氏　　名	謝春游
学位(専攻分野)	博士(学術)
学 位 記 番 号	総研大甲第 2286 号
学位授与の日付	2022 年 3 月 24 日
学位授与の要件	文化科学研究科　地域文化学専攻 学位規則第6条第1項該当
学 位 論 文 題 目	移民の食事に関する文化人類学的研究―広島県在住の中国人女性の家庭を事例として―
論 文 審 査 委 員	主　査　　宇田川　妙子 比較文化学専攻　教授 韓　敏 比較文化学専攻　教授 鈴木　七美 比較文化学専攻　教授 朝倉　敏夫 国立民族学博物館　名誉教授 濵田　信吾 大阪樟蔭女子大学　学芸学部　准教授

（様式３）

博士論文の要旨

氏　　名　謝　春游

論文題目　　移民の食事に関する文化人類学的研究
——広島県在住の中国人女性の家庭を事例として——

本研究の目的は、移民が移住先の生活環境で食事をどのようにかたちづくっているかを記述、分析し、移住先での経験や生活形態、社会関係が移民の食事のありかたにどのような影響を与えるのかを明らかにすることである。移民は、移住先の環境に適応していく中で、衣食住をはじめとする生活様式の様々な変化を経験する。その中で、食事や食習慣は移住前の生活を最も強くとどめるとされる一方で、様々な要因で徐々に変化していくこと、移民集団の食事の全体的な傾向などが文化人類学や社会学の分野において議論されてきた。これらの研究の主要な課題には、1）摂取する食品の特徴からみた移民の食事、2）移住先の社会環境における移民の食事、3)トランスナショナルな視点から捉えられる移民の食事、をあげることができる。一方で、生活の中での食事に対する体系的かつ詳細な記述、および移民を取り巻く家族内外の社会関係の視点から食事に対する考察は必ずしも十分には行われてこなかった。

本研究では、1990年代以降に来日した広島県在住の育児経験をもつ中国人女性移民を対象とし、彼女たちとその家族の食事を文化人類学的なフィールド調査にもとづき観察、記録、分析し、これまでの研究では十分には議論されてこなかった食事の機会、作り手と食べる者との関係、共食する者の人間関係と実際に食べているものの関係を探究する。

本論文は、研究の目的と問題意識を述べた第１章、広島県およびその周辺に居住している中国人移民の家庭の食事の傾向と実態を示す第２章から第４章、考察の第５章、結論の第６章で構成される。

第１章では研究の目的、先行研究、調査の理論と方法、調査対象を説明する。

第２章では、広島在住の中国人女性移民24人の家庭における正月、春節、日常のそれぞれの食事の内容を調べた結果を示し、食事の機会と食べた品目とを明らかにするとともに、統計学的な手法を用いて、食事の機会、食べた品目、配偶者の組み合わせをはじめとする家庭の所属性の関係を分析する。

第３章では、2000年以降に来日し、子育て期におかれている中国人女性移民３人の家庭の食事を対象とし、配偶者の国籍や家族関係、女性自身の就労状況、家族の食嗜好、友人関係や地域とのつながりといった社会関係が食事の内容に与える影響を分析する。

第４章では、1990年代に来日し、20年以上の滞在経験をもつ子育て終了後の女性移民３人の食事の経験をもとに、配偶者の国籍や家族関係、女性自身の就労状況、家族の食嗜好、友人関係や地域とのつながりといった社会関係に加え、国際移住・結婚・育児といった人生の段階的な変化、日本社会の変化が食事の内容に与える影響を分析する。

以上、中国人女性の家庭の食事に関する統計学的手法による分析と民族誌の記述的な分析を踏まえながら、女性移民の食事がどのように移住先でかたちづくられてきたかを、彼

女たちの移住先での経験や生活形態、社会関係から考察し、本研究では以下の3つの結論を得た。

1) 女性移民の配偶者の出身国と食事の時期が、実際の食事の内容を大きく左右する。

2) 女性移民が形成する家族関係およびライフステージの変化に伴う家族関係のあり方が、食事に影響を与えている。

3) 女性移民の移住先での食事が地域社会の人々とのつながりの中でかたちづくられ、それが移民と地域社会とをつなぐ機能を有する。

女性移民は配偶者の出身国や地域の違いによって、移住先で異なる家族関係を形成していく。ただし家庭では主に女性が夫と子どもの食事を用意し、夫中心、子ども中心、夫と子どもと自身それぞれの食嗜好や健康を同時に考慮した様々な食事形態が見られる。家族関係において重要なのは、姑との関わり方が移民女性の食事を作るという行為に顕著な影響を与えていたことである。女性移民はその人生の各段階において、子どもの成長や姻族の高齢化、彼女たち自身の就労状況の変化を経験していく。ともに食事を摂る家族の構成、すなわち共食の相手の変化は、女性移民のライフステージの変化と食事作りに対する思惑や実際の食事作りの変化と密接に関わっている。

また、移住先の地域社会において、女性移民たちは中国人の友人、「干媽」と呼ばれる母親的な存在となる日本人女性、日本人の友人や同僚などの人々との間に様々な人間関係を築く。これらの人間関係を通じて、女性移民たちが出身地以外の中国の他の地域や、日本、第三国の食に触れることで、それらを自分たちの食事に取り入れようとする食行動がしばしば見られる。もちろん、女性移民たちは受動的に影響を受けるだけでなく、自分たちの出身地の食を生かした会食や料理教室などの活動に積極的に関わることで、地域社会との紐帯を築くとともに、彼女たち自身の食事を多様化していくという側面もあった。

以上のことから、これら日本在住の中国人女性移民の食事とは、配偶者の出身国と食事の機会に大きく影響されるとともに、ライフステージの変化に伴う自身の就労状況、家族関係のあり方と、地域社会の人々とのつながりの中で複合的、重層的に築かれていくものであると結論づけることができる。特に、女性移民の食事は性別役割分業型社会という日本の社会環境にも影響を受けていた。こうした女性移民たちの食事の実態は、日本社会における女性の生活や日本社会の現実をも映し出す鏡とも言えるであろう。

Form8・Separate Sheet
（様式８・別紙１）

Results of the doctoral thesis defense

博士論文審査結果

Name in Full
氏 名　　謝　春游

Title
論文題目　移民の食事に関する文化人類学的研究―広島県在住の中国人女性の家庭を事例として―

本論文は、広島県在住の中国人女性移民を対象とし、彼女たちの食生活の実態とその変化を、家族・親族、職場、地域社会、さらにはSNSなどとの関わりのなかで具体的に記述し、彼女たちの食のあり方がどのように形作られているのかについて考察することを目的とする。移民の食生活については、これまで多くの調査研究が様々な観点から行われているが､ホスト社会への適応やエスニシティなど､個別のテーマに沿った記述や考察が多く、その実態を総合的に把握して分析しようとする試みは少なかった。本論文では、その問題意識に立ち、女性移民の食のあり方を彼女たちの生活全般のなかに位置づけ、時間的変化も視野に入れた文化人類学的な調査を行い、民族誌的な記述とともに統計学的な分析を加えた考察をしていくことによって、移民たちの移住先での食生活の変遷と現状を総体的に明らかにし、食と移民の生活との関係の複雑さについてあらためて考察する。

本論文は、結論を含めて全6章で構成される。

第1章では、研究の目的が先行研究の整理とともに提示され、調査の概要がその対象および方法とともに説明される。本研究の調査の特徴としては、１）主に広島市、福山市という、これまで特に日本の事例では研究蓄積が多かった中国人集住地区とは異なって、移民たちが散在して生活している地方都市の事例であること、２）対象とする移民は主に1990 年以降に来日した中国人女性であり、なかでも育児経験をもつ女性たちに焦点を当てることによって家族関係やその変化に積極的に注目したこと、３）近年、移民たちの生活にとって重要なコミュニケーション・ツールとなっている SNS も積極的に調査対象として取り上げたこと等が挙げられている。また、現地での調査は、2017年から2021年にかけて断続的に行われた合計約13ヶ月間におよび､参与観察､対面インタビューのほか、とくに現地調査以外の期間にはSNSを用いた調査も積極的に行っている。

第2章は、本研究の調査対象となった中国人女性27名のうち、24名（うち配偶者が中国人または日本人である者はそれぞれ 12 名）の食事内容に関する統計分析である。出願者は、この24名が同期間（特別な行事のない時期、正月、春節の各1週間）に行った食事（合計 1275 回分）の内容について綿密な調査を行い、そこで食されていた料理 341 品目を洗い出し、日本食・中国食などの類型化はせずそのまま数量化理論Ⅲ類を用いて解析してクラスター化することによって、その特徴を明らかにした。その結果、彼女たちの食事内容は、全体としては、配偶者の出身国（中国か日本か）と、行事との関連性に影響されているが、解析から抽出されたクラスターを詳しく見ていくと個別差も小さくなく、彼女たちの食の複雑さが浮かび上がった。

第3章は、前章の24名のうち3名を取り上げて、彼女たちの食生活を、いつどこで誰

と何をどのように食べているのかについて、民族誌的に詳細に記述したものである。3 名はいずれも 2000 年以降に来日し、学齢期前の子どもをもち、核家族で暮らしているが、配偶者の出身国、配偶者および自分の親族との関係、就業状況、友人関係や地域とのつながり、SNS の利用、さらには健康観や食の嗜好にも違いがある。そうした差異とともに描き出された食事の実態からは、女性移民たちが家庭の内外でさまざまな関係を展開するにあたって、多様な食をその場に合わせて選択し調整していることが明らかにされた。また、SNS やインターネット通販など、地域を越えてトランスナショナルに広がりうる関係も近年では彼女たちの食に大きな影響を与えていることが指摘されている。

第 4 章は、前章が共時的な視点からの記述であるのに対して、通時的な変化に着目する。ここでは、1990 年代に来日して 20 年以上の滞在経験を持ち、すでに子育てを終えた女性移民 3 名について、各々の食生活の実態と変遷が来日以前からのライフヒストリーとともに詳述される。とくに本章では、子育て期後の食事の変化、および日本の地域社会での交流や日本人との交友関係（なかでも「干媽」と呼ばれる年上の日本人女性との親密な交友関係）に関する記述が興味深い。彼女たちが、それら多様な関係や機会をとおしてさまざまな食の知識を獲得したり、家族および就労の変化に対応したりすることによって、自分たちの食事の内容や嗜好も変化させてきた様子が説得的に描き出される。

第 5 章では、これまでの議論を振り返り、そこに浮かび上がってきた女性移民たちの食の実態を形作っている要素として、1）配偶者の出身国、2）家族・親族関係、3）家庭外の諸関係（職場、友人、地域社会、SNS 等）という 3 点に着目する。そして、個々の移民におけるそれらの違いが、ライフステージに沿った変化や、近年の SNS 利用のような時代の変化とも関連しながら、彼女たちの食生活を多様化させていることを体系的に考察する。

そして第 6 章の結論では、全体の議論を総括し、あらためて女性移民の食生活と彼女たちを取り巻く家庭内外の社会関係とが密接に関連していることを確認し、その結論が今後の移民の食に関する研究にもたらす意義について整理する。

本論文は、以上のように広島県在住の中国人女性移民たちの食生活の実態を総体的に明らかにしたものであり、第一に、その民族誌としての成果を高く評価したい。そこでは、移民たちが家族、職場、地域等、様々な場面で行っている食の選択について、食事の内容だけでなく、食材、作り方、食事の場所・機会、作り手と食べる側の関係、共食における人間関係等についても詳細に記述・分析されており、食をテーマとする秀逸な民族誌となっている。また、背景の異なる 6 名の事例を取り上げ、ライフヒストリーとともに詳述し、通時的な変化も明らかにしており、食を通して描き出された女性移民の民族誌として読むこともできる。こうした民族誌的記述は、移民たちにとっての食の意味や社会的機能の多様性・複雑さを具体的に顕わにすることに成功している。その成果は、これまでエスニシティとの関わりなどのテーマに偏りがちだった移民の食に関する研究を再検討していくことにつながり、エスニシティとの関連という課題についてもより多角的な検討の必要性を浮かび上がらせるなど、今後の食研究に大きな貢献をなすものである。

さらに本論文は、調査・分析の手法に関しても高い学術的意義を有している。これまで食生活に関する実態調査は国内外ともにアンケート調査に依拠するものが多かったが、本研究は文化人類学的な視点と手法を生かし、ラポールに基づく長期間の参与観察を行い、さらには SNS を用いたインタビューや写真収集なども駆使して、質的・量的な分析手法を

組み合わせた意欲的な研究であり、今後の食研究における調査・分析方法に新たなモデルを提示している。また、人類学的な研究としても、SNS を積極的に利用した本研究は、デジタル時代、with コロナ時代のフィールドワークの新たな可能性を示すものである。

その一方で、問題や課題がないわけではない。本研究は広島県在住の 1990 年代以降に来日した中国人女性たちを対象としているが、この事例を移民の食に関する研究全般に適切に位置づけるためにも、彼女たちの属性の特徴について、出身国である中国との関係やその地域差、時代・世代による特徴や差異、移民集住地区等の他地域との比較なども含めて、より詳細な議論を行うことが求められる。また、統計学的分析と質的分析の組み合わせが考察に十分に生かされていない部分があり、他の量的分析の手法も取り入れるなど、さらなる検討が望まれる。そして、本論文は移民の食生活を総体的・具体的に描き出すことに主眼が置かれているため、エスニシティなどの個別の論点に関しては、興味深い記述や指摘はあるものの、その理論的な展開に物足りなさを覚える箇所が散見される。しかしながら、これらは本論文の価値を損なうものではなく、いずれも今後、この成果をもとに研究を発展させていく上での課題である。

以上の点を鑑み、審査委員会は全員一致で、本論文が博士の学位を授与するに値すると判断した。